



## 農村生活のすすめ

### 第9回：「人口減少社会の暮らしと経済」についてのすこし長いコラム

主席研究員 川井 真

#### 目次

- |                   |               |
|-------------------|---------------|
| 1. 農山漁村の暮らし       | 5. 文明の大転換     |
| 2. 『逝きし世の面影』という作品 | 6. 定常経済という選択  |
| 3. 逝きし世の風景        | 7. 新たな日本文明の胎動 |
| 4. 逝きし世の農村生活      |               |

#### 1. 農山漁村の暮らし

21世紀に日本が直面することになった「ドラスティックな人口減少をとまなう超高齢社会」とは、実際のところ、どのような世界なのだろうか。とりわけ人口減少の著しい農山漁村が目指すべき社会システム、すなわち暮らしの背景にある社会構造とそこで共有される価値とは、具体的にどのようなものなのだろうか。

ここ数年のことであるが、全国数か所の農山漁村地域を定期的に訪問するようになってから、その土地の人たちと何の変哲もない世間話をしたり、あるいは彼らの暮らしの活動に参加して日常の喜怒哀楽を共有させられたりする機会が増えた。すると不思議なことに、そこでは国家あるいはグローバルな経済の動きや、景気・不景気もしくはGDP成長率といった指標が、なにかむなしく、違和感があり、生活そのものとは無縁のものに感じてくる。もちろん、情報化社会は地方の隅々まで浸透しているから誰もが世界情勢は理解しているし、意識もしている。当然にして、年金、医療、介護や生活支援といった公的サービスの財政が、年々厳しくなっている

ことも知っている。しかし彼らにとって、それは主として中央政府の問題であって——もちろん国民生活の質が向上することは大歓迎なのだが——それ以上でも以下でもないのである。それによって地域の暮らしが改善され、まちに活気が戻ってくるとは、誰も考えていないし、なかでも農林漁業に従事する人たちは“生活”と“自然”と“労働”が一体をなしているため、生涯現役であり、生活リスクに対してもどこか潔く、ゆえに自立的であり、また多くの集落では「おすそ分け文化」がいまだ機能していることもあってか、健康が一番の財産であるという認識が少なからずある。したがって貨幣経済への精神的依存度も、都市部に比べ相対的に小さい。

また、農山漁村地域とりわけ僻地と呼ばれる地域の暮らしを観察していると、在りし日の日本文明——もし、そう呼べるものがあるとするならば——に遭遇したような気持ちになる瞬間が、これまで幾度となくあった。豊かな高齢社会とは、もしかすると文明の転換をとまなうようなダイナミックなパラダイムシフトによってのみ、実現できるものなのではないのか、彼らの暮らしを眺めていると、

そんな予感がするのである。厳しい農山漁村で生きる人たちとの交流が深まるにつれて、この感覚がますます顕著になってきている。わたしたちの思考や行動のすべてを支配する現代の価値観は、いつごろ日本に持ち込まれ、普遍化したのだろうか。すでに失われた日本の社会構造と社会思想あるいは庶民文化は、本当にそのすべてが、稚拙で時代遅れで非難されるべきものであったのだろうか。そのような視座に立って、もう一度、貧しさとはなにか、豊かさとはなにかについて、再考してみる意味があるように思う。

## 2. 『逝きし世の面影』という作品

日本近代史家・思想史家である渡辺京二は、江戸時代末期から明治時代の初期に日本を訪れた多くの外国人たちが見た「日本の情景」と「日本人の姿」を、『逝きし世の面影』という著書に綴った。たしかに、それは歴史学研究や日本文化研究といった高尚なものではない。したがって、たんに海外から日本を訪れ一定期間そこに滞在した外国人たちの感想の寄せ集め——ツイッターのつぶやき程度——に過ぎない、といった一部の専門家や知識人からの批判もある。しかし、その「つぶやき」の寄せ集めによって描き出されている世界は何なのだろう。たとえそれが、異なる文化、異なる社会環境で育った異邦人の浅薄な日本描写であって、本著作が異国情緒に触れた旅行者の一時の感情を編纂したものに過ぎなかったとしても、また彼らに一定の政治的圧力がかかっていたとしても、彼らを感じさせ、驚愕させた情景はたしかにそこに存在し、その小さな宇宙の営みを彼らが体感していたことだけは事実であろう。このすべてを西欧オリエンタリズムによるたんなる日本美化と決

めつけてしまうのは、あまりにも安易で短絡的ではないだろうか。すくなくとも、イギリスの外交官アルジャーノン・ミットフォードに「おとぎの国」あるいは「妖精の国」と形容させた日本は、そのとき、たしかに存在していたのである。

## 3. 逝きし世の風景

ここですこし乱暴ではあるが、この『逝きし世の面影』に登場する外国人たちの記録をたどることで、在りし日の日本の暮らしを想像し、そこに現代を重ね合わせながら、来るべき未来の姿を探っていきたいと思う。

たとえば、福澤諭吉とも親交のあった東洋学者で詩人のエドウィン・アーノルドは、当時の日本と日本人のことを「その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のように優しい性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙譲ではあるが卑屈に墮することなく、精巧であるが飾ることもない。これこそ日本を、人生を生甲斐あらしめるほとんどすべてのことにおいて、あらゆる他国より一段と高い地位に置くものである」と語り、西欧には存在しない風変わりな文化と一種独特な価値観をもつ民族を称賛した。また、水戸藩を脱藩した攘夷派浪士が在日本英国公使館を襲撃した「第一次東禅寺事件」の当事者であることでも知られる、イギリス外交官のローレンス・オリファントにしても、母親に宛てた手紙に「日本人は私がこれまで会った中で、もっとも好感のもてる国民で、日本は貧しさや物乞いのまったくない唯一の国です」と書いた。さらに、日本の近代的水道事業を主導して横浜水道を完成させたヘンリー・S・パーマーは、日本人の印象を「誰の顔にも陽気な性格の特徴で

ある幸福感、満足感、そして機嫌のよさがありありと現れていて、その場所の雰囲気じつと融けあう。彼らは何か目新しく素敵な眺めに出会うか、森や野原で物珍しいものを見つけてじつと感心して眺めている時以外は、絶えず喋り続け、笑いこけている」と述べているし、『ジャポン1867年』という紀行文を記したフランス貴族のリュドヴィック・ド・ボーヴォワール伯爵は、日本人を「いささか子どもっぽいかも知れないが、親切と純朴、信頼に満ちた民族」と評したうえで、「地球上最も礼儀正しい民族」であるとさえ言っている。

その具体的な例を挙げよう。上述したエドウィン・アーノルドは当時の日本人の日常生活を以下のように描写している。

「これ以上幸せそうな人びとはどこを探しても見つからない。喋り笑いながら彼らは行く。人夫は担いだ荷のバランスをとりながら、鼻歌をうたいつつ進む。遠くでも近くでも、『おはよう』『おはようございます』とか、『さよなら、さよなら』というきれいな挨拶が空気をみたく。夜なら『おやすみなさい』という挨拶が。この小さい人びとが街頭でおたがいに交わす深いお辞儀は、優雅さと明白な善意を示していて魅力的だ。一介の人力車夫でさえ、知り合いと出会ったり、客と取りきめをしたりする時は、一流の行儀作法の先生みたいな様子で身をかがめる」。そしてアーノルドは次のような結論を示す。「この独特で、比類するものなく、スポイルされず、驚異的で魅力的で、気立てのよい日本を描写しようとしてめながら、私はどんなにそれが描写しがたいか実感している。彼らのまっただなかでふた月暮してみても、私は日本に着いて二週

間後に大胆にも述べたことを繰り返すほかない。すなわち、よき立ち振舞いを愛するものにとって、この“日出る国”ほど、やすらぎに満ち、命をよみがえらせてくれ、古風な優雅があふれ、和やかで美しい礼儀が守られている国は、どこにもほかにありはしないのだということをしる

と語るのである。

#### 4. 逝きし世の農村生活

では農村生活はどうだったのか。明治新政府の司法省顧問となったフランス人法律家のジョルジュ・ブスケは、当時の農民を以下のように表現している。「この性質たるや素朴で、人づきがよく、無骨ではあるが親切であり、その中に民族の温かい気持ちが流れている」と述べ、さらにまた「彼らはあまり欲もなく、いつも満足して喜んでさえおり、気分にもむらがなく、幾分荒々しい外観は呈しているものの、確かに国民のなかで最も健全な人々を代表している。このような庶民階級に至るまで、行儀は申分ない」と称賛するのである。またドイツ商人のF. A. リュードルフは、下田を訪れた際に目にした日本の農村風景について、「郊外の豊饒さはあらゆる描写を超越している。山の上まで美事な稲田があり、海の際までことごとく耕作されている。恐らく日本は天恵を受けた国、地上のパラダイスであろう。人間がほしいというものが何でも、この幸せな国に集まっている」と著書『グレタ号日本通商記』に記している。さらに勝海舟などの幕臣に近代海軍教育を施したオランダ海軍軍人のヴィレム・ホイセン・ファン・カッテンディーケは、日本の農業技術について「日本の農業は完璧に近い。その高い段階に達した状態を考慮に置かならば、こ

の国の面積は非常に莫大な人口を収容することができる」と評価した。彼以外にも、たとえばアメリカの外交官であったタウンゼント・ハリスは「私は今まで、このような立派な稲、またはこの土地のように良質の米を見たことがない」と語り、長崎商館長を務めたヘルマン・フェリックス・メイランも「日本人の農業技術はきわめて有効で、おそらく最高の程度にある」といった。

また一方で、イギリスの女性紀行作家で『日本奥地紀行』を著したことで知られるイザベラ・バードは——僻地における極貧生活もつぶさに観察したうえで——米沢平野については「美と勤勉と安楽にみちた、うっとりするような地域」と表現している。そして「米沢平野は南に繁栄する米沢の町、北には人で賑わう赤湯温泉をひかえて、まったくのエデンの園だ。“鋤のかわりに鉛筆でかきなさらされた”ようで、米、綿、トウモロコシ、煙草、麻、藍、豆類、茄子、くるみ、瓜、胡瓜、柿、杏、<sup>ザクロ</sup>柘榴が豊富に栽培されている。繁栄し自信に満ち、田畑のすべてがそれを耕作する人びとに属する稔り多きほほえみの地、アジアのアルカディアなのだ」と語るのである。その他、日本の農業技術の高さと田園風景の美しさに目を奪われた人物は数知れない。日本人に対して厳しい批判的なまなざしを送り続けた、あのイギリスの外交官で医師でもあったラザフォード・オールコックでさえも、日本農業のあり方には驚嘆している。そして欧米人観察者の、そのほとんどが、「幸せで満足そうな日本農民像」を記録にとどめているのである。

## 5. 文明の大転換

この『逝きし世の面影』には、すでに失わ

れた「ひとつの文明」の姿が記されている。渡辺が「私にとって重要なのは在りし日のこの国の文明が、人間の生存をできうる限り気持のよいものにしようとする合意とそれにもとづく工夫によって成り立っていたという事実だ」と語るとおり、忘れられた文明と、そこに暮らす日本人の姿が、まるで現代を生きる読者にバックキャストを促すかのような構成で描かれている。そこには渡辺の——真に豊かな文明が滅亡したことへの——哀惜の念が込められているようにも思える。これと同様の感情を抱いた外国人も少なくない。イギリスの日本研究家で「俳句」や『古事記』の英訳をしたことでも知られるバジル・ホール・チェンバレンは、欧米人にとって「古い日本は妖精の棲む小さくてかわいらしい不思議の国であった」としながら、当時の日本社会については「大西洋の両側のアングロサクソンよりも根底においては民主的である」という大胆な見解を示した。そして、「ほんものの平等精神、われわれはみな同じ人間だと心底から信じる心が社会の隅々まで浸透している」と語るのである。しかし彼の著作『日本事物誌』には、「古い日本は死んでしまった」という一文がある。まさに彼は、それを古き日本の墓碑銘たらんとするもの、と位置付けたのである。また江戸時代後期に下田の駐日アメリカ総領事館に通訳として赴いたヘンリー・ヒュースケンも、変わりゆく日本を哀惜しながら、「いまや私がいとしさを覚えはじめている国よ。この進歩はほんとうにお前のための文明なのか。この国の人々の質朴な習俗とともに、その飾りけのなさを私は賛美する。この国土のゆたかさを見、いたるところに満ちている子供たちの楽しい笑声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見いだすことが

できなかつた私は、おお、神よ、この幸福な情景がいまや終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳をもちこもうとしているように思われてならない」と語るのである。

欧米の列強は国内経済が飽和状態に陥るとその矛先を海外へと向けた。明治期の日本は、まさに逃げ場所を求めて膨張するグローバルな資本の内部に吸い込まれていったのである。そして、このような西洋文明における資本の蓄積は環境破壊と無秩序な自然資源の乱用によって実現されるわけだが、その過程で政治や文化や生活様式さえも、大きな変容を遂げるようになった。

まさに文明とはひとつの「システム」である。本書での渡辺の言葉を借りるならば、文明とは「ある特定のコスモロジーと価値観によって支えられ、独自の社会構造と習慣と生活様式を具現化し、それらのありかたが自然や生きものとの関係にも及ぶような、そして食器から装身具・玩具にいたる特有の器具類に反映されるような、そういう生活総体」である。すなわち、諸々の要素がお互いの存在の前提を供給しあいながら存在し、その相互に依存しあう複数の要素により構成される全体である。したがってそれは、ある特定の要素へのアプローチから全体の挙動を明らかにすることのできない非線型に連関する複雑なネットワークを構成し、ひとつの要素への刺激が全体の構造を変容させてしまうような位相空間（生活総体）を生じさせるのである。日本の文明論的転換とは、経済システムの変革すなわち地域経済が国民経済へと移行し、そしてそれがグローバル資本主義に内部化さ

れることによって不可逆的なものとなり、この経済への刺激が初動となって、結果的に生活総体そのものが変容を遂げることになった近現代史的な出来事、という見方もできるだろう。

## 6. 定常経済という選択

異邦人たちが目にした江戸時代末期から明治時代初期までの日本人の生活空間には、オーストリアの哲学者イヴァン・イリイチが語る「コモンズ」（共通価値を創造する共用環境）の存在と「バナキュラー」な価値（市場化されない価値）がみごとに映し出されている。そして、この時代の暮らしには周囲を海に囲まれた日本という場所を、正確にはその島を構成する夥しい数の生活空間を、豊かで気持ちのよい場所にするための——相互主観的に形成された——合意があり、その暮らしを維持していくための土台には、自然と人間が永続的に共生していくための「定常経済」<sup>1</sup>がある。ヒュースケンが「西洋の人々が彼らの重大な悪徳をもちこもうとしているように思われてならない」と予感したように、まさに新たな文明は、このような「定常経済」を否定し、補完性あるいは互酬性の原理を内包した「コモンズ」を徐々に解体し、「バナキュラー」（市場で売買されないもの）には無意味で価値のないものというレッテルを張って、埋葬してしまった。このような連鎖的な崩壊は、ある意味で必然の結果であったように思える。なぜなら「定常経済」とは、その性質からすると「コモンズ」とセットになってはじめて機能する経済、そのようなゆるぎやすいものなのではないか、という感覚を払

1 定常経済とは、一定の人口規模と一定の人工物のストックをもち、それをいかに環境における物質・エネルギー循環のフローに負荷をかけずに維持していくか、そこに最も配慮した経済をいう。

拭することができないからである。

いま、市場原理主義という狂信的な思想が蔓延していくなかで、わたしたちは理にかなった問いを発することができなくなっている。そもそも地球そのものは閉じられたシステムであり、宇宙は熱を放出する場所ではあるが物質などをそこから調達することはできない。すなわち地球は基本的にオートポイエティック（自己準拠的かつ自己生産的）な閉じたシステムなのである。したがって、生態系の営みを維持し、生物圏の限界を超えることのない経済システムをどのように設計し、稼働させることができるのかを問うべきなのであって、GDP成長率を維持するために、どのようにCO<sub>2</sub>排出量を削減してエネルギー効率を上げるのかといった議論は、まさに「ジェヴォンズのパラドックス」<sup>2</sup>を招くだけではないだろうか。生物圏に存在するすべてのものは、低エントロピーの物質を利用して活動し、高エントロピーの物質を環境へと戻している。そこには本来、ある種の定常状態が維持されていなければならない。この地球上において、低エントロピーの物質あるいはエネルギーは2つしかない。太陽からのインフローと地中に眠る地下資源である。一方、高エントロピーの物質とは廃棄物のことである。このような地球環境を取り巻く物質・エネルギー循環のフローを「スループット」と呼ぶが、人口の増加ならびに化石燃料に依存した人工物のさらなる増加で、スループットは出口でオーバーフローを起こし、すでにその限界を超えてしまった。

## アルカイックな円環の経済



メリーランド大学公共政策学部名誉教授で世界銀行上級エコノミストを務め、2014年には地球環境問題に貢献した人物に贈られる「ブルー・プラネット賞」を受賞したことで知られるハーマン・デイリーは、持続可能性の3条件として、①「再生可能な資源」の持続可能な利用速度は、その資源の再生速度を超えてはならない、②「再生不可能な資源」の持続可能な利用速度は、再生可能な資源を持続可能なペースで利用することで代用できる速度を超えてはならない、③「汚染物質」の持続可能な排出速度は、環境がそうした汚染物質を循環し、吸収し、無害化できる速度を上回ってはならない、の3つを挙げている。この条件を満たすのは容易なことではなく、人口が密集した地域とりわけ過剰消費の抑制が効かなくなった都市部は、さらに困難を強いられることになるだろう。日本全体で捉えるならば、スループットを低いレベルに抑えるためにも、都市と農山漁村の関係を見直すタイミングが、まさに到来しているように思う。

<sup>2</sup> イギリスの経済学者ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズは、技術の進歩で石炭をより効率的に利用することができるようになった結果、より広範な産業で石炭が使われるようになったことに着目し、技術の進歩がかならずしも燃料消費量の減少をもたらすとは限らないことを立証した。すなわち技術の進歩により資源利用の効率性が向上したにもかかわらず、資源の消費量は減らずにむしろ増加してしまうというパラドックスをいう。

## 7. 新たな日本文明の胎動

日本の長期人口波動を示したグラフを確認すると、江戸時代の安定期と明治維新以降の急激な増加が、そこに鮮明に描き出されている。文明論的な視座に立てば、この背景には狩猟採集から農耕へと移行していくときのような、ダイナミックな変化があったと考えることもできるが、そもそも、この国土における適正な人口規模とはどの程度のものなのだろうか。カッテンディーケは「日本の農業は完璧に近い。(中略)この国の面積は非常に莫大な人口を収容することができる」と述べたが、それが1億2千万人超をイメージしていたとは到底思えない。はっきりしていることは、この人口のすべてを養っているのは日本の国土でも、それを取り巻く海でもないということであり、わたしたちの生存を保障しているのは国際的な相互依存の関係である。そのことからすれば、現在の日本の人口規模は明らかに大きいように思われる。したがって、現在マスコミを騒がせている人口減少をあま

り悲観的に捉えるべきではなく、成長神話から脱却し、持続可能な社会への変革の意思を持つならば、そこに希望も見えてくる。補完性の原理に価値を置き、すべてのものが有機的に結びあうことでシナジー効果を生み出すような、そのようなネットワーク型社会を再構築していけばいい。

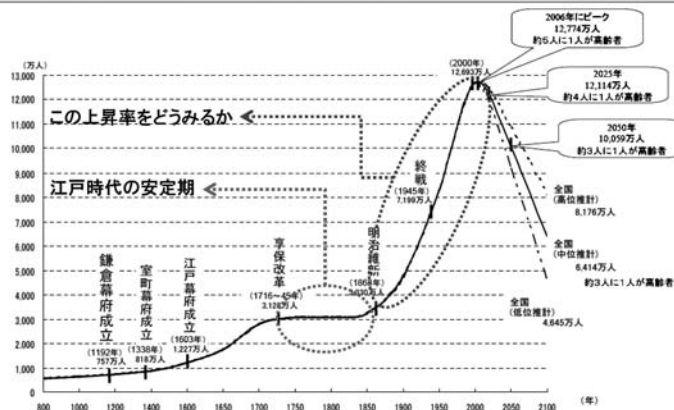
たとえばオーストラリア国立大学名誉教授のガバン・マコーマックは、著書『空虚な楽園——戦後日本の再検討』のなかで、

「現代日本の豊かさの物質的・技術的基盤という実績に疑問の余地はないし、日本の最大の富は国民の善良さ、寛大さ、人間性、知力にある。冷戦の狂気、行きすぎた企業社会、環境悪化、物神崇拝的消費至上主義、そして今は、集団的な憂うつ症とヒステリーにたいして過去数十年間闘ってきた大衆に深く根ざした変革への願望は、通常、国際メディアには見えないが、政治経済の3C（建設、消費、管理）とはまったく違った3C（共同社会=COMMUNITY、

## 人口の長期推移[国土交通省資料]

我が国の人口の長期的推移

我が国の総人口は、2006年をピークに減少に転じ、2050年には1億59万人と予測されている(中位推計の場合)。



(出典) 総務省「国勢調査報告」、同「人口推計年報」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成14年1月推計)」、国土庁「日本列島における人口分布変動の長期時系列分析(1974年)をもとに国土交通省国土計画局作成。

## 20世紀の3Cから21世紀の3Cへ



協力 = COOPERATION、保全 = CONSERVATION) のネットワークを草の根レベルで維持している」

と語っている。これはまさに「定常経済」と「コモンズ」の再生を促すメッセージとして受け取ることができるし、それはまた、日本人の持つ潜在力への期待にほかならない。

ユーラシア大陸の東の端から新たな文明の胎動が感じられる。その萌芽は、すでに日本のいたるところで散見される。発祥地となるのは疑いなく、人口規模が小さく農林水産業を基幹産業とする農山漁村地域であろう。たとえば、総務省が制度化した「地域おこし協力隊」に参加する若者たちの多くは、自然共生という新しい感性をもって地域で活躍している。市町村の職員となったり、NPOを組織したり、地元の人たちと起業したりと、その活動は様々であるが、定住するものも増えてきた。すでに彼らは、その土地に溶け込んでいる。不思議なことに、協力隊員たちは皆、共同体意識や場所とのつながり意識が強く、その活動の原動力となっているのは契約でも義務でも物質的インセンティブでもない。意思以前の行動なのかもしれないが、彼らは

「コモンズ」と「バナキュラー」なものに価値を置いているのである。

そこで最後に、誤解のないようにすこし補足しておきたい。それは文明が後退することはない、ということである。過去の文明は地層のように積みあがり、それを土台にして新しい文明は生まれてくるのだから、懐古趣味に走って、江戸時代のような不便でも心豊かな生活に回帰しよう、などと考えるのは、そもそも誤りである。わたしたちは望む望まざるにかかわらず、もうその場所には戻れないのである。善きものは残し、悪きものは排除し、そこに先進の知恵と技術を注ぎ込み、まったく新しいものを創造していくのである。

すくなくとも農山漁村地域がこれから選択すべき道は、GDPを指標とする成長ではなく、自然と人間が永続的に共生していくための持続可能な発展ではないだろうか。すでに多くの人々が、その道を歩みはじめている。

## 【参考文献】

- ・渡辺京二 (著) (2005) 『逝きし世の面影』 平凡社
- ・イヴァン・イリイチ (著)、桜井直文 (監訳) (1999) 『生きる思想 新版——反＝教育／技術／生命』 藤原書店
- ・イヴァン・イリイチ (著)、玉野井芳郎・栗原彬 (訳) (2006) 『シャドウ・ワーカー 生活のあり方を問う』 岩波書店
- ・ハーマン・E・デイリー (著)、新田功・藏本忍・大森正之 (共訳) (2005) 『持続可能な発展の経済学』 みすず書房
- ・ガバン・マコーマック (著)、松居弘道・松村博 (共訳) (1998) 『空虚な楽園——戦後日本の再検討』 みすず書房